

◆2022 年 3 月第 3 週の礼拝 説教

■日 時：2022 年 3 月 20 日（日）

■場 所：立川教会

■説教題：「タラントンの譬えから学ぶこと」

■聖 書：マタイによる福音書 第 25 章 14 節－30 節

お早うございます。

今年度のオンラインによる最後の礼拝となりました。

明日をもって蔓延防止等重点措置が解除されますが、コロナが収まったわけではなく、健康管理はこれからも続きます。くれぐれも無理をすることなく、身体を労わり、健康を維持し続けたいと思います。

私は、昨年 10 月の終わりですが、遅い夏休みをいただき、小高伝道所以外にあと一つ代務をしている京都の北白川教会の墓前礼拝に参加しました。代務であるにもかかわらず、今年度は一度しか奉仕が出来なかったのですが、聖餐式と召天者記念礼拝を行うために訪れました。

北白川教会の教会墓地は、琵琶湖を望む小高い丘の上にあります。墓碑には「神に知られたる者」との文字が刻まれています。私が知る教会関係の墓碑の多くは、御言葉が書かれているのですが、北白川教会の碑は違っていました。「神に知られたる者」と言う言葉です。

私たちが神様を知るのではなく、神様によって知られている者と言う意味です。

今日与えられた御言葉に加えて、この言葉からも私たちの人生について考えてみたいと思います。

立川教会の役員は、年に一度は、礼拝の奨励あるいは感話を担当します。役員以外の方でも担当していただくことがあります。特に今年度は、私が不在となる第 4 週は、役員の方々などに講壇を受け持っていただきました。改めて思うのですが、そこでなされた奨励や感話は、本当に心豊かにさせられるものばかりでした。普段の会話からはなかなか聞くこと出来ないそれぞれのキリスト教との出会い、信仰の歩みが語られ、思わず聴き入りました。「そうだったのか。そうして歩まれたのか。そんなことがあったのか」と。

ところで、以前、ある方の奨励で、「キリストの香り」について触れられたことがありました。

「キリストの香り」、それはどのような香りなのでしょう。

「キリストの香り」を放つとは、どのような生き方をすることなのでしょう。

そして今、立川教会に呼び集められた私たちは、どのような香りを放っているのでしょうか。

このような問いを抱きながら、今日与えられた御言葉に目を留めたいと思います。

まず、14 節から 18 節です。

14：「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、しもべたちを呼んで、自分の財産を預けた。」

15：それぞれの力に応じて、一人には5 タラント、一人には2 タラント、もう一人には1 タラントを預けて旅に出かけた。早速、

16：5 タラント預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに5 タラントをもうけた。

17：同じように、2 タラント預かった者は、ほかに2 タラントをもうけた。

18：しかし、1 タラント預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。

芸能人をタレントと呼びますが、その原語となるタラントと聞くと、あの人はタラントに恵まれていると言うように、私たちは何かその人に与えられた特別な能力、才能を考えがちです。学習能力や芸術面での才能、運動能力などです。しかし、私はここでイエス様が言われているタラントとは、そのようなものを指しているのではないと思うようになりました。

まず、タラントですが、これはお金の単位を表わし、金額的に言えば、はるかに膨大なお金です。時代によって貨幣価値は変わりますが、ある聖書学者の調べたところ、ヨセフスの『古代史』によれば、ヘロデ大王の息子アルケラオスが継承したユダヤ、サマリア、イドゥマヤの地域に住む人々から得た税金の収入が年 600 タラントです。又、ガリラヤとヨルダンを支配したアンティパスが得た人々からの税収が年 200 タラントです。それから考えてみても、1

タラントンは、現在の貨幣価値の1千万はおろか、億を下らない大きな数字であることは間違いありません。そして、主人が旅行に出かける際に、僕たちに彼の財産を分け、ある僕に5タラント、別の僕に2タラント、そして3人目の僕に1タラントを預けたと言うのです。

19 節から 23 節。

19：さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。

20：まず、5タラント預かった者が進み出て、ほかの5タラントを差し出して言った。『御主人様、5タラントお預けになりましたが、御覧ください。ほかに5タラントもうけました。』

21：主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

22：次に、2タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、2タラントお預けになりましたが、御覧下さい。ほかに2タラントもうけました。』

23：主人は言った。忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』

5タラント預かった者と2タラント預かった者は、それぞれ他に5タラント、2タラントを儲け、主人の財産を増やします。そのことを主人は喜び、その喜びを共にするようそれぞれに呼びかけます。しかし、1タラントを預けられた者は、違いました。

24 節、25 節。

24：ところで、1タラント預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、

25：恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』

即ち、預かった1タラントの財産を、少しでも減らしたらどうなるかとの主人への恐れから、何もせずに地中に隠しておいたと言うのです。それに対し、26 節、27 節。

26：主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。』

27：それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。

この僕は、他の2人の僕と違って、1タラントンを動かす勇気がありませんでした。少しでも預けられた財産を減らしたらどうなるかとの恐れから何も出来ず、ただ時が経ち、主人が帰って来るのを待つだけでした。その結果、彼には主人の厳しい叱責と28節から30節の出来事が与えられたのです。

28：さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、10タラントン持っている者に与えよ。

29：だれでも持っている者はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。

30：この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。』

このタラントンの譬えから、私は幾つかのことを考えさせられました。

与えられたタラントン、金額にして想像すら出来ないほどの途方もない数字です。私は、1タラントンを地中に隠した僕の気持が分かるように思います。恐いのです。それをどう動かして良いかも分からない、動かす勇気が出ないのです。じっとしたまま、時が過ぎるのを待つ。恐らく、この1タラントンを主人から預けられたこの僕にとって、このことはまさに突如彼の人生を襲った試練であったのかも知れません。その試練に立ち向かう勇気が出ないまま、時が過ぎ去るのを待っていたのではないかと思いました。

それでは、5タラントンや2タラントンを預けられた2人にとって、このタラントンとは何であったのかと言うことです。先の僕は、試練と考えました。しかし、この2人にとって、タラントンは予期せぬ主人からの贈り物、想像もしなかった恵みでした。そして、主人に対し、力を尽くしてその恩に報いたいと考えたのだと思います。タラントンに対する向き合い方の決定的な相違、一方は試練として恐れ慄き、他方は感謝と喜びをもってタラントンに向き合いました。

もう 10 数年も前になりますが、神学校時代、説教演習の課題テキストとしてこの箇所が与えられた時、私は、このタラントンとは、その人の持っている能力と考えることに何か違うものを感じました。もし能力と考えるのであれば、学習能力にしても、運動面や芸術面での才能にしても、そのようなタラントンを与えられている人は一部の限られた人になります。でも、一部の限られた人にしか通用しない話を、イエス様がなさるとは思えませんでした。それでは、全ての人にとって意味を持つこの話しのタラントンとは何かについて思い巡らしました。そして、ふと気が付いたのです。実は、このタラントンとは、神様から一人ひとりに与えられたかけがえのない命であり、それを生きる人生ではないかと。そして、5 タラントン、2 タラントン、1 タラントンとは、その命を、人生をどのようにして生きるのかが問われているのではないかと思いました。

私たちは、母の胎に命が宿された時から、神様によってタラントンを預けられています。それが 5 タラントンなのか、2 タラントンなのか、1 タラントンなのかは、人生を歩み終えた時に、どのように生きたかによって神様から示されるのです。タラントンを増やすことがあるとすれば、自らの生きる視線の先に神の国を捉え、天に宝を積むごとく生きることであり、タラントンを地中に埋めたままにしておくこととは、その視線は自分に向き、そこで閉じて、自分のために生きることに終始することだと思うのです。

私が知る一人のキリスト者がいます。

その方は、病のため、両手も両足を失われました。

もう本当に長い長い間、ベッドでの生活が続いています。

10 年も、20 年も、介護なしに生きることが出来ません。

でも、その方の何と明るいことか。

何と、安らぎに満ちていることか。

見舞うたびごとに、見舞う私の方が、その方から慰めを受け、希望が与えられるのです。

まさしく、その方が放つキリストの香（かぐわ）しい香りに励まされるのです。

キリストの香りは、より困難な、より厳しい試練に置かれた方の中から発せられるのかも知れません。あの十字架を前にした百人隊長が、キリストの息絶えて行く姿を見て、「まことにこ

の人は神の子であった」との信仰告白に導かれたように、十字架のキリストの香りは、彼を包みました。

私は、この4月から福島の被災した二つの伝道所の牧師になります。

コロナ禍の中で示された道でした。

一昨年8月、同じく被災し、教団から多額の借入金を抱えたまま、牧師が召され、無牧となった教会を訪れました。中に入れず、外から見ただけでしたが、会堂も、牧師館も、支援によって立派に再建されていました。しかし、教会の集会案内の看板には何も書かれていませんでした。

それを見た時、私は、この教会に来なければならないのではないかと思います。現在の私たちの教会なら、後任の牧師はきっと与えられる。しかし、信徒2人しかいないこの教会に来る牧師はいないと思えたからです。

結果として、その教会ではなく、同じく被災した2つの伝道所に導かれました。

その一つである小高伝道所は、80を超える信徒が一人で教会を守っておられます。その方と共に礼拝を続けることが与えられた務めの一つです。

そして後一つの浪江伝道所は、3・11以来時が止まり、信徒は一人もいなく、再建の見通しは立っていません。その浪江で礼拝の明りを再び灯すこと、それが私の願いです。

東北教区から与えられた任期は3年です。まず3年取り組みを続け、その後のことは、神様に任せています。神様が必要とされればその地に留まり続けるであろうし、道半ばにして召されるかも知れません。今は、彼の地でキリストが待っておられる、その招きに応えたいと思うのです。そして、今、改めて思います。皆様お一人おひとりは、すでに神に知られたる者として歩み続けていると。

「キリストの香り」を放つ、それは「神に知られたる者」との言葉とも重なります。

主人から2タラント、5タラントを与えられ、他に2タラント、5タラントを儲けた者とも重なります。

「キリストの香りを放つ」とは、地位や名誉や財産を築くことによって「世に知られたる者」となることではなく、どんなに小さな業であっても、人々の目から見て、取るに足りない業であっても、「神に知られたる者」となることです。

「キリストの香りを放つ」とは、自分の幸せだけを追い求めて生きることではありません。

たとえ、身体は動かなくなっても、何も出来なくなっても、十字架の上のキリストを見上げ、祈り続けることは出来ます。

2022 年、神様は、私たちを福音宣教の最前線へ導かれています。

その務めを、それぞれの持ち場にあって、力強く果たすものになりたいと思います。 祈りましょう。